ラグビーのオリンピック種目採用についての一考察

A study of the possibility that rugby is played in the Olympic Games

1K05B085　　桑原　宜
指導教員　　主査　友添秀則先生　　副査　寒川恒夫先生

1．本研究の動機

先日「ラグビーはオリンピック正式種目になるか」という記事を読んだことから、私がこれまで生涯の大半を捧げてきたと言っても過言ではないラグビーフットボール（以下「ラグビー」と略す）が、世界最大のアマチュアリズムのスポーツ競技会であるオリンピックの正式種目に採用されるかについての可能性を探求したいと考えたのが本研究の動機である。ラグビーワールドカップ（以下「RWC」と略す）は急成長を遂げ、そのTV視聴者は 40 億人を超え、いまやメジャースポーツと言えるほど普及・拡大しているラグビーであるが、そもそも何故オリンピック種目ではないのだろうか。オリンピックが遵守してきたアマチュアリズムをラグビーが最も信奉してきたにもかかわらず、ラグビーがオリンピック種目ではないことには疑問が残る。こういった疑問を解消するためにも本研究にて、ラグビーがオリンピック正式種目に採用される可能性および是非について検証したい。

2．本研究の目的

本研究はラグビーというスポーツ種目の普及状況・商業スポーツとしての価値や現状、課題を加味しながら、ラグビーとオリンピックをアマチュアリズムという観点から対比させ、ラグビーがオリンピック正式種目として正式に採用される可能性およびその是非を明らかにし、ラグビーの魅力を世界に発信し、スポーツ文化の一つとして将来的に更なる普及・発展を遂げる足がかりとすることを目的とする。

3．本研究の方法

本研究は文献講読によって行なう。

4．各章の概要

＜第1章＞

現在ラグビーはオリンピック正式種目ではない。過去4大会においてはオリンピック正式種目であったラグビーが 1924 年オリンピックパリ大会を最後に除外された経緯には、様々な理由が存在する。そして、ラグビーがオリンピックに復活することなく 80 年の時が過ぎた今、ラグビーは再びオリンピックに登場することを望んでおり、セブンス（7人制）ラグビーが今後オリンピック種目に採用されることを、インターナショナル・ラグビー・ボード（以下「IRB」と略す）は最優先事項として活動を展開している。

＜第2章＞

RWC の成功からもラグビーが持つスポーツとしての商業的価値は高い。ラグビーには人々を魅了する独自のスピリッツが存在する。しかし、ラグビーは発生当時からアマチュアリズムを信奉・誇示し、ノーサイドの精神、One for All, All for One に代表される独自のスピリッツを堅守してきたが、現在はオープン化し、プロ化に取り組んでおり、そのジレンマに苛まれているのである。

＜第3章＞

近代オリンピック誕生の頃から、アマチュアリズムはオリンピックを代表するスピリッツであり、オリンピックはアマチュアリズムとともに発展してきた。しかし、現在商業主義・プロフェッショナリズムの波に押され、かつては参加資格であったアマチュ

ア規定は排除され、その存在意義は危ぶまれており、もはや虚構となりつつある。

＜第4章＞

IRB の主張によれば、ラグビーがオリンピック種目に採用されることで発生するメリットは多数存在し、ラグビーがオリンピック種目に採用される可能性は大いにある。ラグビーはオリンピック種目として世界に発信され、更なる発展を遂げるかもしれない。しかし、閉鎖的かつ独自に発展を遂げたラグビーとオリンピックの共通項であると思われたアマチュアリズムは空洞化しつつあり、ラグビーがオリンピックに復活した場合、ラグビーが持つ独自のスピリッツをも失う危険性がある。

＜結章＞

ラグビーはオリンピックに採用される条件を満たしおり、商業的観点からは正式種目に採用されるべきだと言わざるを得ない。ラグビーが良きアマチュアリズムから派生した独自の精神を誇示し後世に継承しながら、それをスポーツの祭典オリンピックで世界に発信し、ラグビーの魅力をより多くの人に伝えることで、ラグビーという一つのスポーツ文化として、さらなる普及・発展を遂げることを期待したい。